
執筆 者 紹 介

阿久津 智 (あくつ さとる)	拓殖大学外国語学部教授
舒 志田 (じょ しでん)	立教大学兼任講師
吉田 敬 (よしだ たかし)	元立正大学教務助手
肖 江楽 (しょう こうらく)	広西師範大学外国語学院講師
于 艶麗 (う えんれい)	瀋陽航天航空大学講師
権 宇琦 (けん うき)	拓殖大学大学院院生
樊 怡君 (はん いくん)	拓殖大学大学院院生
波木井 優子 (はきい まさこ)	川崎市教育委員会非常勤講師
平井 吾門 (ひらい あもん)	立教大学文学部准教授

編 集 後 記

2021年度も引き続き新型コロナウイルスへの対応に追われた一年でした。立教大学を含む多くの大学図書館では、他研究機関所属の研究者はおろか、卒業生への図書館公開を見送っております。今更申し上げるまでもありませんが、人文学の研究は図書館を有効活用することから始まると言っても過言ではありません。インターネット上の資料公開やコーパスの拡充が進んできたとはいえ、この状況が続くことは日本語研究においても大きな停滞を招いてしまうことを危惧しております。その一方で、日本国内に比べて日本語資料という点では不十分な点も多いと考えられる海外から、今回も複数の論考が寄せられております。海外における日本語研究の方が活況であり高質であると言われる日も遠くはないのか、すでに言われて久しいのか微妙なところでもありますが、日本語研究においては未活用の資料が山積しており、まだまだそこには数えきれないほどの「資料があるからこそできる研究」の種があるはずです。多くの資料を抱える立教大学での学びを中心とした日本語研究が益々盛んになるよう、事態の好転とみなさまの研究の進展を祈念いたします。徐々に対面での活動機会も増えつつありますので、来年度こそは何らかの形で対面での活動ができることを切に願っております。

雑誌に関しては、今年度も無事刊行に至ることができホッとしているのが正直なところです。分量の制限がほぼないことの影響もあるでしょうが、研究論文というよりも調査報告や読み物のような感じのものがやや目立ちますので、今後は改めて学術論文としての質の高さも研究会の中で共有していければと考えております。内外から厳しいご意見を賜ることができれば幸甚です。引き続きどうぞよろしく願いいたします。(平井)